

保育者志望の学生のこどもを対象とした言葉がけに関する一考察（１）

—保育実習指導Ⅱの授業実践から—

松本 亜香里 伊藤 喬治

要旨

本稿では、保育者養成を行う短期大学の２年生を対象に、保育実習指導Ⅱの授業内で行った課題である、「指定された写真を対象とした言葉がけ」の取り組みを通して、学生という言葉がけの特徴と課題について検討を行った。

「認める」言葉やこどもと同じ目線で並んでかける言葉はいくつか挙がっているが、こどもの育ちを支える言葉となる「対象物とこども」「イメージを引き出す」に分類される言葉は少なかった。学生は実習でも、自分がこどもに何か「してあげる」ことに視点を置きがちである。直接的な言葉がけが第一に行われたのは、保育のイメージとして、このような何かを「してあげる」ことが基盤にあるためではないかと考えられた。今回の言葉がけに関するワークにおいても、自分の言葉がけによってテーマとなった画像から子どもたちの中でどのような思考ややり取りが想起されるか、という点よりも、テーマとなった画像の解説や、子どもの中で想起した感情の代弁といった点が初期には多く見られた。

本研究から今回学生という言葉がけの特徴と、そこで置かれている視点について明らかにした。今後は、今回行ったワークの形態を見直し、さらに「物」と「自分」をつなげる手だてとなったり、「対象物」からイメージをふくらませたり引き出したりする機会、いわば間接的な保育のための「しかけ」を作ること意識が向くよう設計していくことが望ましいであろう。また、対象となる子どもたちの年齢や発達段階に応じた言葉の工夫ができるよう、学生の学びの段階に応じた授業設計の検討が必要となろう。

キーワード：言葉、言葉がけ、表現

１．はじめに

コミュニケーションツールの多様化により、チャットのように短い文で会話が成り立ったり、絵文字や略語で返事をしたりするなど、特に若年層において対話のあり方が変化している状況が見られる。メールや SNS でのやり取りは増えるなか、face to face で対話したり、手紙を書いたりする機会が減る一方で、保育現場では、保育者はこどもと言葉を交わし、アイコンタクトで語ることが様々な場面で求められることに変わりはない。また文章による表現については、筆者らは授業内でリフレクションシートを活用することがあり、学修の記録として、野線がある場合、そのうち 9 割は埋めるように実習指導の授業内で指

導しているが、たとえ5行程度の欄であっても2行書くことが精一杯になっている学生が少なくない。実習前後の学生との面談からも、思ったことや感じたことを具体的に言語化することに、また文章化することに困難さを感じていることも浮かび上がっている。これらから、学生は生活上のコミュニケーション形態の変化による生活と実践の場でのギャップと、文字を介したコミュニケーションの課題の二点において難しさが見られる。先行研究では、そういった保育者志望の学生の語彙力に関する研究や学外実習の場面における実習生の言葉がけに関する研究、保育の場面での言葉がけに関する研究、また現職保育者と実習生の言葉がけの比較研究は見られる。

筆者らは、保育者養成を行う短期大学の2年生を対象に、保育実習指導の授業内で、学生の保育者としての感性を高めるとともに、対面でのダイナミクスやリアルタイム性も踏まえた、感じたことや思ったことをスムーズに言語化する能力を育成することを目的とし、プリントされた特定の対象物への言葉がけの取り組みを試みた。

本研究は、授業での取り組みから学生の言葉がけを抽出し、学生の語彙や言葉がけの特徴について検討することとする。

2. 研究方法と目的

2-1. 研究方法

本研究は、プリントされた特定の対象物に対して、一人一言ずつ言葉を添えるという実践から学生の傾向を分析することを目的とする。

対 象 : A短期大学幼児保育学科2年生保育実習Ⅱ履修者19名

実施場所 : 保育実習指導Ⅱの授業内

実践方法 : プリントされた特定の対象物に対して、一人一言ずつ言葉を添える

使用対象物: 「かめ」(写真1)・「駐輪場の自転車」(写真2)・「朝顔」(写真3)

分析方法 : 実践において学生が発する言葉を記録から分類を行い分析する



写真1 かめ



写真2 駐輪場の自転車



写真3 朝顔

2-2. こどもと保育者と言葉

保育者はこどもに対し、説明や指示だけでなく、こどもの思いに共感したり、こどもの思いを代弁したり、遊びの発展のきっかけとなる言葉を発したりする。保育者の発する言葉には、その時々の子どもの姿や子どもたちの状況に応じて、思いやねらいが込められている。逆にこどもの遊びや思考の妨げとなる場合には、あえて言葉をかけず見守る場合もある。言葉の発達では、言語理解が言語表現よりも先行することから、月齢の低い乳児に対しても、保育者はミルクをあげる時もおむつを交換する時もアイコンタクトを取りながら言葉をかけている。月齢が進むと、「あーあー」などの声を発しながら指差しをするようになり、大人が応答することで言葉の獲得につながる⁽¹⁾⁽³⁾。こどもと大人と対象物の三項関係が繰り返され言葉を獲得すると、今度は、こどもは大人に伝えようとしはじめる。その段階で、こどもが発した言葉にどのように応答するかにより、言葉の獲得だけでなく、こどもの感性が広がったり深まったりすることが期待される。

増田は、こどもに「言葉」が出るまでのプロセスで、大人がこどもの姿に気づき、その姿にどのような反応をし、どのようにかわってきたのかが大事だと述べている。かわり方によって、こどもの心の底から湧き出るようなことばや感性が育まれるとも示している。また、言葉と感性について、わざと曖昧な言葉を使うことで、こどものイメージを広げていくこともあっていいのではないかと述べている。

このように、保育の中で、保育者が発する言葉はこどもの育ちに直接的にかかわってくる。藤樫は、瞬間的な言葉がけの難しさを挙げたうえで、日々の記録や保護者からの話、ほかの保育者の目でとらえた姿などから個々のこどもの実態を考察し自分なりの見解でそ

の子を理解することが大切であり、そのことが意図的でより良い言葉がけにつながるとしている。一方では、先述のとおり保育者養成の場において、学生たちは言語のスムーズな使用について難しさを抱えていることが考えられるものの、具体的に学生の言葉がけの特徴やその傾向、より具体的な指導上の課題についてはこれまで多く検討されてこなかった。言語をスムーズに使用するための練習を行っていくことが保育者養成の場で求められることから、本研究では学生の言葉がけの特徴について実践の分析を通して検討することとした。

2-3. 本研究に関連する5領域

本研究では、主に領域「言葉」と「表現」が関連してくる。保育所保育指針第2章保育の内容では、領域の概念はないものの、1歳未満児への乳児保育において表4のようにねらい及び内容として、「言葉」と大人との「応答」を挙げている。ここでは、子どもが大人に、表情や発声、喃語等を受けてもらったり、応答的なふれあいを受けたりする中で、子ども自身の情緒や自分以外への興味関心の広がり示唆している。

表4 保育所保育指針第2章保育の内容「1 乳児保育に関するねらい及び内容」関連事項抜粋

- | |
|--|
| <p>1 乳児保育に関わるねらい及び内容</p> <p>(2) ねらい及び内容</p> <p>イ 身近な人と気持ちが通じ合う
受容的・応答的な関わりの中で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う。</p> <p>(ア) ねらい</p> <p>② 体の動きや表情、発声等により、保育士等と気持ちを通わせようとする。</p> <p>(イ) 内容</p> <p>① 子どもからの働きかけを踏まえた、応答的な触れ合いや言葉がけによって、欲求が満たされ、安定感をもって過ごす。</p> <p>② 体の動きや表情、発声、喃語等を優しく受け止めてもらい、保育士等とのやり取りを楽しむ。</p> <p>③ 生活や遊びの中で、自分の身近な人の存在に気付き、親しみの気持ちを表す。</p> <p>④ 保育士等による語りかけや歌いかけ、発声や喃語等への応答を通じて、言葉の理解や発語の意欲が育つ。</p> <p>⑤ 温かく、受容的な関わりを通じて、自分を肯定する気持ちが芽生える。</p> <p>ウ 身近なものと関わり感性が育つ
身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤を培う。</p> <p>(ア) ねらい</p> <p>① 身の回りのものに親しみ、様々なものに興味や関心をもつ。</p> <p>(イ) 内容</p> <p>① 身近な生活用具、玩具や絵本などが用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心をもつ。</p> |
|--|

1歳以上3歳未満児では、言葉の獲得や言葉による表現、話をしたり聞いたりする身近な人とのやりとりが領域「言葉」のねらい及び内容で挙げられており、領域「表現」では興味関心の広がりやイメージや感性を豊かにすることが挙げられている。乳児保育のねらい及び内容では、「自分」と「保育者など身近な人」「対象物」を中心としていたが、1歳以上3歳未満児では「友達」が加わっている。しかし、この段階では「伝える」「聞く」「イメージする」「表現する」ととどまっている。一方で3歳以上児では、一方的なやりとりから、さらに「伝え合う」といった話を聞いて伝えて共有するといった言葉の往復や、気持ちを通わせることが加わっている。

表5 保育所保育指針第2章保育の内容「2 1歳以上3歳未満児の保育に関するねらい及び内容」と「3 3歳児以上児の保育に関するねらい及び内容」関連事項抜粋

<p>2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容</p> <p>(2) ねらい及び内容</p> <p>エ 言葉</p> <p>経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。</p> <p>(ア)ねらい</p> <p>①言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる。</p> <p>②人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする。</p> <p>③絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。</p> <p>(イ)内容</p> <p>①保育士等の応答的な関わりや話しかけにより、自ら言葉を使おうとする。</p> <p>②生活に必要な簡単な言葉に気付き、聞き分ける。</p> <p>⑤保育士等とごっこ遊びをする中で、言葉のやり取りを楽しむ。</p> <p>⑥保育士等を仲立ちとして、生活や遊びの中で友達との言葉のやり取りを楽しむ。</p> <p>⑦保育士等や友達の言葉や話に興味や関心をもって、聞いたり、話したりする。</p> <p>オ 表現</p> <p>感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。</p> <p>(ア)ねらい</p>	<p>3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容</p> <p>(2) ねらい及び内容</p> <p>エ 言葉</p> <p>経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。</p> <p>(ア)ねらい</p> <p>①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。</p> <p>②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。</p> <p>③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。</p> <p>(イ)内容</p> <p>①保育士等や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。</p> <p>②したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。</p> <p>③したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。</p> <p>④人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。</p> <p>⑤生活の中で必要な言葉が分かり、使う。</p> <p>⑦生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。</p> <p>オ 表現</p> <p>感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。</p> <p>(ア)ねらい</p>
--	---

<p>②感じたことや考えたことなどを自分なりに表現しようとする。</p> <p>③生活や遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになる。</p> <p>(イ) 内容</p> <p>⑤保育士（保育教諭）等からの話や、生活や遊びの中での出来事を通して、イメージを豊かにする。</p> <p>⑥生活や遊びの中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する。</p>	<p>②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。</p> <p>③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。</p> <p>(イ) 内容</p> <p>③様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。</p> <p>⑧自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。</p>
---	--

3. 実践結果

印刷された画像に対し、実習時に子どもへ言葉をかけることを想定し、一人一言ずつ言って時計回りに1周することを伝え、ワークを行った。先頭の学生へは考える時間を与えず、すぐにワークに取り掛かった。

最初に「かめ」を対象としたワークでは、「かめ」に関する言葉は16名中6名、「子ども」の生活と「かめ」をつなげるような言葉は2名、「かめ」の状態や生態に関する内容で、子どもが考えるよう導くような問いかけが5名であった。先頭の学生が「～かな」と子どもに問いかける言葉から始まり、全体的に問いかける内容が多く16名中11名がそのような言葉を発した。また、順序的な特徴として、最初は視覚的に想起されたと考えられる表現(①、②、③、④、⑤等)や、正答のある質問(①、③等)といったところから始まり、次に対象物と子どもの関係、事実についての質問(⑨、⑩)の段階を経て、子どもたちに思考を想起する質問(⑪、⑫、⑭、⑮、⑯等)を投げかける段階となっている傾向がみられる。

次に「駐輪場の自転車」を対象としたワークでは、自転車とその背景に関する言葉が15名中7名、子ども自身へ働きかけるような言葉が4名、自転車の画像からイメージを引き出す言葉が1名だった。「かめ」のワークに続いて、問いかけるような言葉は9名だった。一人は思い浮かばず自分の番を見送った。最初は視覚的に想起されたと考えられる質問(①、②等)から始まったが、それからすぐにこのような視覚的に想起される共感の表現、質問や、子どもと対象物の関係を取り上げた言葉がけ、思考を想起し想像力に働きかける質問がなされた。

最後に「朝顔」を対象としたワークでは、3周してやることとした。3周する中で7名自分の番を見送る学生がいたため、41の言葉となった。朝顔では「花」と「葉」、画像全体の見た目から発した言葉は19であった。「子ども」の生活と「朝顔」をつなげるような言葉は6あった。また、イメージを引き出すような言葉は9あった。「朝顔」に関して自分の持つ知識を子どもに伝えたり問いかけたりするものなどが7であった。視覚的に想起されたと考えられる質問や、視覚的に共有する事実に関する共感を求めるもの、視覚的なものから対象と子どもの関係の事実に関する質問から始まって、途中から対象そのものだ

表6 言葉がけのワーク結果

	【かめ】	【駐輪場の自転車】	【朝顔】
学生が 発した 言葉	①冷たいかな ②わーい ③どれくらいの大きさかな ④気持ちよさそうに泳いでいるね ⑤水の中にいるね ⑥どこを見ているのかな ⑦メスかな ⑧大きいね ⑨飼ったことある？ ⑩触ったことある？ ⑪何食べるんだろうね ⑫竜宮城に連れていってくれるかな ⑬（撮るのが）近いね ⑭どこに向かっていているのかな ⑮どうやってうまれるんだろうね ⑯水の中で息できるのかな	①何台あるかな ②何色があるかな ③大きいね ④乗れるように頑張ろうか ⑤どんな人が乗っている？ ⑥何色持っている？ ⑦赤があるね ⑧たくさんあるね ⑨自転車乗れる？ ⑩床が綺麗だね ⑪乗ったら楽しそう ⑫石に映っているの何かな ⑬何色に乗りたい？ ⑭自転車いくらかかな ⑮どこで撮ったのかな	①何の花かな ②においはあるのかな ③はっぱがあるね ④お花の大きさはどれくらいかな ⑤何色の花が好きかな ⑥もっと育つか ⑦（つるは）どれくらいの長さかな ⑧どこまで続いているのかな ⑨家にあるかな ⑩いつの季節に咲くかな ⑪他にどんな色の花が咲くかな ⑫きれいだね ⑬何でつるが巻いているのかな ⑭どうやって育つのかな ⑮紐ざらざらかな ⑯虫はいるかな ⑰育て方知ってる？ ⑱花びら何枚あるかな ⑲お花屋さんに行ったことある？ ⑳「朝顔」っていうんだよ ㉑つぼみからまた咲くかな ㉒棒がきゅうりみたいだね ㉓真ん中が白いね ㉔咲いている花としばんでいる花があるね ㉕紫の花の周りが白いね ㉖夕方になるとしばむんだよ ㉗はっぱはつるつるかな ㉘はっぱは上の方にいっぱいだね ㉙はっぱの形がおもしろいね ㉚何の花が好き？ ㉛水をあげると元気になるかな ㉜どうしてこんな形の葉っぱなんだろうね ㉝なんで黄緑の葉っぱはないのかな ㉞だれが育てたのかな ㉟後ろに家があるね ㊱はっぱの中が白いね ㊲お日様が好きなんだよ ㊳紫でも少し色が薄いのと濃いのがあるね ㊴咲く季節が決まっているんだよ ㊵だれの家かな ㊶他の種類の花も育ててみよう
分類	見た目から：③④⑤⑧⑬⑯ かめとこども：⑨⑩ イメージを引き出す：①⑥⑪ ⑭⑮ その他：②⑦⑫	見た目から：①②③⑦ ⑧⑩⑫ 自転車とこども：④⑥ ⑨⑬ イメージを引き出す：⑤ その他：⑪⑭⑮	見た目から：①②③④⑦⑮⑯⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶ 花とこども：⑤⑨⑭⑮⑳㉑㉒ イメージを引き出す：⑥⑧⑩⑪⑬⑭ ㉓㉔㉕ その他：⑫⑯⑰⑱㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶

けでなく一般化された対象との関係性を問う質問や、思考を想起し想像力に働きかける質問がなされていると見受けられた。

4. 考察

本研究での取り組みは、印刷された画像に対し実習時にこどもへ言葉をかけることを想定したワークだったため、実際にこどもとかかわった場面ではなかった。また、こどもへの言葉がけを想定したものの、対象年齢や場面はあえて限定しなかった。あくまで「想定」であり一人ひとり順に発言していったため、偏りが見られるのは否めない。そのような中で、表6下のように4つに分類できた。まず、画像の見た目に対する言葉、次に対象物とこどもをつなげる言葉、そして、画像からこどもにイメージを引き出すような働きかけとなる言葉、最後にその他となる。山崎らは、保育者の言語的応答を「励まし」「指示的リード」「非指示的リード」「状況の説明」「情報の伝達」「繰り返し」「代弁」「相手への注目」「発問」と分類している。山崎らの分析に置き換えると「励まし」「状況の説明」「情報の伝達」「代弁」「相手への注目」「発問」の6項目に分類できる。

また、全体的な傾向として、テーマとなる画像が出された当初は視覚的に想起された内容の言葉がけがなされ、その後視覚的な言葉がけが「ネタ切れ」の状態になると対象物一般に関する質問や、対象物を媒介に思考を想起する言葉がけがなされている様子が見受けられた。つまり、学生は言葉がけについて、最初はテーマと子どもたちを媒介する主体として振る舞い、子どもはテーマの画像について説明される対象とされるケースが多いことが見受けられた。この場合、子どもは主体的にテーマとやり取りをするよう言葉がけによって導かれているのではなく、保育者というメディアを通して、テーマからの情報を得るかたちでのやりとりがなされる。その後、子どもがテーマに直接触れる主体として振舞うための、ヒントを提示するような、環境構成的ともいえる言葉がけがなされるようになる。この時点で、保育者はテーマと子どもの間に位置する主体から、テーマと子どもの主体的なやり取りを支援するための場を設定する主体へとかわり方の変化がみられる。こういった直接的な言葉がけから間接的な言葉がけへの移り変わりは、これらが自覚的になされたというよりも、「ネタ切れ」から仕方なくなされている印象も受ける。

そこで、今回の検討から四点の特徴が明らかとなった。一点目に、学生たちの言葉がけが、画像の見た目に対する言葉、次に対象物とこどもをつなげる言葉、そして、画像からこどもにイメージを引き出すような働きかけとなる言葉、最後にその他の四種類に分類できることである。次に二点目として、全体的な傾向として、画像の見た目に関する言葉がけがもっとも数が多く、次に対象物とこどもをつなげる言葉、そして画像からこどもにイメージを引き出すような働きかけとなる言葉の順に少なくなっていることである。三点目に、視覚的な情報から想起されたと考えられる言葉がけや、画像をマクロ的な固有のものとして捉えた質問から始まって、次第に画像から一般化した概念を使用する言葉がけがな

されるような順序的な特徴があることである。さらに、質問の場合、最初は正解のある質問や事実を問う質問がなされ、その後に価値についての質問がなされている。そして四点目に、学生は当初は言葉がけでは子どもたちを対象とした主体として振舞うかたちの直接的な言葉がけが多くなされていたという点である。

先に述べた「認める」言葉やこどもと同じ目線で並んでかける言葉は、どのワークでもいくつか挙がっているが、こどもの育ちを支える言葉となる「対象物とこども」「イメージを引き出す」に分類される言葉は少なかった。学生は実習でも、自分がこどもに何か「してあげる」ことに視点を置きがちである。直接的な言葉がけが第一に行われたのは、保育のイメージとして、このような何かを「してあげる」ことが基盤にあるためではないかと考えられた。今回の言葉がけに関するワークにおいても、自分の言葉がけによってテーマとなった画像から子どもたちの中でどのような思考ややり取りが想起されるか、という点よりも、テーマとなった画像の解説や、子どもの中で想起した感情の代弁といった点が初期には多く見られた。

この取り組みを通して、今回学生の言葉がけの特徴と、そこで置かれている視点について明らかになった。今後は、今回行ったワークの形態を見直し、さらに「物」と「自分」をつなげる手だてとなったり、「対象物」からイメージをふくらませたり引き出したりする機会、いわば間接的な保育のための「しかけ」を作ること意識が向くよう設計していくことが望ましいであろう。

5. おわりに

乳児、特に0、1歳児、こどもの年齢が低い場合は、大人からの一方的な言葉がけが、こどもの語彙獲得の足がかりとなる。そこから応答的なやりとりに発展し三項関係が成り立つことで、人とのかかわりに心地よさを感じ自発的に発語するようになる。

また、保育者の言葉選びや言葉がけの重要性から鑑みても、保育者の語彙力や語彙選出力、場面認識力によりその保育者が行う保育が左右されるといっても過言ではない。そのため、保育者志望の学生は実習段階からさまざまな保育者に触れ、言葉がけのレパートリーを蓄積し、自分なりの言葉に置き換えたり、新たに考えたりしてノートなどに書き留める習慣が望ましい。そうすることで、瞬間的に自然と言葉が沸いてくるであろう。今後の課題として、本研究での取り組みから、物に対する言葉がけのレパートリーから、対象となるこどもたちの年齢や発達段階に応じた言葉の工夫ができるよう、学生の学びの段階に応じた授業設計の検討が必要となろう。

参考文献

- 1) 湯汲英史 (2016)「こどもがのびる 保育 45 のことばがけ 一歳児からの発達に応じ

た関わり方」、合同出版

2) 増田修治 (2009) 「こどもが育つ言葉がけ一聴きとる・つなげる・ふくらませる 口頭詩をもとにして」、ひとなる書房

3) 今井和子 (2016) 「0 歳児から 5 歳児 行動の意味とその対応」、小学館

4) 厚生労働省 (2018) 「保育所保育指針解説」、フレーベル館

5) 山崎晃・樟本千里 (2002) 「子どもに対する言語的応答を観点とした保育者の専門性」、保育学研究第 40 号第 2 号、pp.90-96

6) 藤樫啓太 (2008) 「言葉がけの難しさ (保育の現場から)」 幼児の教育、pp.52-57、日本幼稚園協会

7) 中川愛・松村京子 (2010) 「女子大学生における乳児へのあやし行動：乳児との接触経験による違い」、発達心理学研究第 21 巻第 2 号、pp.192-199